

次の活動候補地ミャンマーを視察

PHJは現在、タイ・インドネシア・カンボジア・ベトナムの4国で医療保健活動していますが、これまでの経験を他の国でも活かしたいと考えています。PHJの新たな活動候補地として最有力候補のミャンマーをこれまでに何度か訪問し、現地のニーズや事業実施可能性を調査しました。下記に最新の視察報告(2013年10月)を記載します。



ミャンマー連邦共和国はかつてビルマと呼ばれ、インドシナ半島の西側に位置します。鎖国的な経済政策によって長らく経済が停滞していましたが、2011年から急速に民主化と経済改革を進め、急激に変わりつつある国です。首都はヤンゴンでしたが、2006年にヤン

ゴンから内陸に320キロメートルほど離れたネピドーに移転しました。

保健状況は、妊産婦死亡率が東南アジアでも高い数値を示しており、2010年の統計では10万件のお産につき200人の妊産婦が亡くなっています。また乳児死亡率(1歳までに死亡する子供の人数)も千人中50人とカンボジアと並ぶ高い数値です。また、マラリアやHIVの感染率も高い地域となっています。母子保健に関するニーズが高いことから、PHJでは昨年よりミャンマーでの事務所開設に向けて調査を行っています。

10月に代表の木村、岡本専門家、中田の3名でミャンマーを訪問し、首都ネピドーでの保健大臣との面談および事業候補地視察を行いました。保健省の長官なども同席する中での面談でしたが、保健大臣からは、継続的な日本の支援に対する感謝と歓迎の意を伝えられました。保健大臣は小児科の臨床医だったこともあり、病院での医療サービス充実に関心が高く、これまでのPHJの活動の中心であるコミュニティよりも広い視野で事業を考えてほしいとの要望がありました。



保健大臣(中央)、保健省の役人とPHJチーム

今回の視察では、ネピドーの農村部に位置するタウンシップ(ミャンマー行政区画で郡に当たる)とヤンゴン郊外であり都市部のタウンシップ2カ所の医療保健施設を訪問しました。



医療保健施設での調査

それぞれのタウンシップには、二次医療を提供する病院だけでなく、タウンシップ市街地に拠点がある母子保健センターと広域を管轄する地域保健センターがあります。センターでは、医師はおらずそれぞれ数名の看護師・助産師が勤務しています。また、地域保健センターの下にサブセンターがあり、助産師一名が勤務し、コミュニティの保健を支えています。訪問先では、スタッフ全員が私たちを待っていており、大変な歓迎を受けました。

訪問した農村部のサブセンターでは、優秀スタッフとして表彰されたこともある助産師に会いました。施設は古いものの、書類や器具がきれいに整頓され、いつでも訪問診療に出かけられるように準備ができていました。村人から陣痛が始まったとの連絡を受けると、彼女はバイクで出産介助に出向きます。村には、ボランティアの補助助産師がいて、助産師を補佐します。全体的に医療保健のための人員は足りていないものの、個々の医療スタッフの医療者としての意識が高く、村人のためにがんばっている様子が伝わってきました。

普通分娩の場合には助産師による自宅分娩でも十分に対応できるのですが、妊産婦や乳幼児の死亡を減少させるためには、お産の異常を素早く察知し、病院へ移送、適切な処置を受ける必要があります。農村部の病院には20万人の人口に対して小さな救急車が一台あるのみで、搬送設備や一次二次医療の連携が十分であるとは言えません。地域で十分な医療サービスが提供できるようになる設備の充実や人材育成などにニーズがあるようでした。

これまでの調査を基に、PHJはネピドー郊外のタウンシップを事業対象候補地として絞り手続きやさらなる調査を進めていくことにしました。ミャンマーで活動を始めるには、団体登録や担当省庁との合意書作成など多くのステップがあります。時間がかかるとは思いますが、着実に進めていこうと思っています。

東京事務所 海外事業部 中田好美

カンボジア

学校保健プロジェクト

カンボジア事務所では、今年度より八神製作所様からのご支援で「コンポントム州パライ・サントック保健行政区内学校保健パイロット・プロジェクト」を開始しました。当事務所では2008年より同地区内の4保健センター、その管轄55村で、母子保健、感染症、衛生、栄養等をテーマに主に乳幼児を抱える母親を対象に保健・衛生教育を実施してきました。この経験を活かしこれまで対象とされていない小学生たちへの保健・衛生教育をやりたいという声からPHJ現地スタッフや小学校校長から挙がったのがプロジェクトの始まりです。当地で流行している疾病は生活習慣を変えることで予防可能なものが多いにも関わらず、成人となつてからの保健教育では行動変容に繋がりにくく、子どもの時からの教育が必要だと認識していた事も理由です。

早速提案書を作成し、州保健局・教育局と合意を取り、保健トピックの選定と学校選択の協議を始めました。基礎的な保健トピックは既にライフ・サイエンス教科の一部ですが、内容が不十分である、カリキュラム通りに授業を実施していないことを考慮し、小学生高学年にとってより強化すべきと思われる5つを選びました。

- ①衛生的な生活
- ②感染症の知識と予防
- ③タバコ・アルコール・ドラッグから身を守る

- ④リプロダクティブ・ヘルス ティーンエージャー妊娠の予防
- ⑤栄養の基礎知識と食生活

学校選択は教育局から6校を推薦してもらい、PHJが育成してきた保健ボランティアの能力、協働しやすい保健センタースタッフがいる等の条件も加味し最終的に2校に絞りま



保健センタースタッフ達と授業計画の検討

した。現在、学校長、教師、保健センタースタッフ、村の保健ボランティアとともにプロジェクト・ガイダンスを終え、上記5つの授業計画書骨子も完成しました。さらに視覚授業教材を作成し、保健センタースタッフと共に授業実施方法のトレーニングを教師・保健ボランティアに行います。同地区内で、地域の保健人材が学校と協働して保健教育を実施する経験はまだ薄く、このプロジェクトを通して地域協働の子どもの健康づくり、予防行動の定着を目指す足がかりになればと願っています。

カンボジア事務所 林 朝子

インドネシア

PHJ 活動現場の視察 — 中央大学

PHJは昨年9月中央大学平澤ゼミの学生達の、「インドネシアの貧困層向け栄養食品(調味料)BOPビジネスの可能性」調査の一環としてPHJが実施している栄養教育改善活動の見学と聞き取り調査を受け入れました。

10月31日バンテン州セラン県ティルタヤサ自治区の診療所・栄養センターで、栄養改善活動を見学させて頂きました。国立栄養センターのウィドド氏のご講演の後、近隣の村の栄養改善開発メニューの紹介があり、メニュー開発者の女性が生き活きと説明をしているのが印象的でした。その後、このメニューを試食している母子20名程に対し、調味料の使用状況、野菜の摂取状況を問うアンケートを現地スタッフに翻訳をお願いして行いました。アンケートを終えるとウィドドさん、スタッフの方と一緒に、鳥の唐揚げやジャックフルーツの煮物、キャッサバの葉の炒めものなど、当地の一般的なお弁当を頂き、伝統的衣装などのお話を伺いながら楽しい昼食の時間を過ごしました。



栄養状況のアンケートを実施

昼食後は診療所の裏にある菜園で、実際に昼食に含まれ、また村の栄養改善メニューでも使われているキャッサバ(根

のでんぷんがタピオカ)の収穫を見学しました。最後に、コーヒーを頂きながら、伊藤所長ご自身のキャリアステップ、なぜインドネシアで活動することになったか、日々村人と接する中で、栄養状態について思う事を伺いました。中でも印象に残っているのは、「糖尿病は贅沢病ではなく貧乏病」というお話です。貧しく充分ご飯を食べられない人が、お茶などに砂糖を沢山入れて空腹をごまかす。栄養失調と糖尿病を併発する事もあると聞き、単に足りない栄養素の摂取を促すだけでなく、現地の人の食文化を壊さずに、過剰に摂取しているものを減らす取り組みも必要だと思いました。

このような気づきは、現地で活動している方とお話する機会を設けて頂いたおかげです。インドネシア研修中は勿論、出発前から色々とアドバイスして下さったPHJの皆様に変な感謝をしております。私たちはこの経験を、自身の研究に存分に活かしたいと思います。本当に有意義な機会をありがとうございました。

中央大学平澤ゼミナール B 代表：鍋島千尋



開発したメニュー(左)と通常の食事(右)の比較

PHJ タイ事務所では外務省補助金を得て2010年11月から3年間、チェンマイ県で子宮頸がん・乳がん検診推進事業を実施してきました。事業終了時には対象女性125,100名中50%以上が子宮頸がんの検診を受ける目標を達成し、70%以上の女性が乳房自己触診の研修を受けました。

大幅な検診率の改善の要因として日野モータース・マニュファクチャリング・タイランド社と日野モータース・セールス・タイランド社から寄贈されたミニバスに外務省補助金で入手した機器を搭載して移動検診を行ったことがあげられます。ミニバス検診のおかげで農村、工場や事務所で働く女性たちが職場で子宮頸がん・乳がん検診キャンペーンに参加することができました。カラフルなミニバスは女性たちの間でも好評で定期的な健診を促進するツールとして有効でした。

事業終了に当たり、PHJはこのミニバスを含め事業全体をチェンマイ保健局に移行することに決め、2013年11月21日にミニバス寄贈式が開催されました。チェンマイ保健局はミニバスの運営責任をサラピー病院に委託し、チェンマイ県内各地での移動検診に使うことにしています。同病院のシンキアウ院長は日野ミニバスを今後も子宮頸がん・乳がん検診に使うことを約束しています。PHJが築いてきた検診推進事

業のノウハウやミニバスは引き続きチェンマイ県内での子宮頸がん・乳がん死亡率の減少に貢献できると確信しています。

ミニバス寄贈式には在チェンマイ日本国総領事館総領事、サラピー郡代表、チェンマイ保健局副局长、サラピー病院院長、PHJ タイ事務所所長など関係者が参列しました。

タイ事務所所長 ジラナン・モンコンディー



◀ミニバスの寄贈

▼プロジェクトスタッフと保健ボランティア

注) この事業は2001年以来、PHJが日本政府、民間の支援を頂きながら、タイ中部、北部チェンマイ県などで試行・改善・展開を続けてきたプロジェクトの集大成です。



東日本大震災復興支援

気仙沼医療機関へのこれまでの支援とこれから

気仙沼地域は宮城県中心部より遠く離れ、気仙沼市立病院と44の民間医療機関等で地域医療を担っていましたが医師は慢性的に不足している状況でした。東日本大震災の発生に伴い、医師会所属の医療機関等の中、37施設が全壊或いは半壊・一部損壊という壊滅的被害にあい、より一層医療過疎となりました。

PHJは当初の緊急支援の後、公益社団法人全日本病院協会(全日病)と連携して気仙沼市医師会に医療機関の被害状況や病院再建に必要な医療機器、什器類のニーズ調査をお願いしました。その結果を基に一次支援として2011年12月に約1500万円相当の医療機器とトラック10数台分の什器類を気仙沼医師会を通して寄贈しました。12年4月には第二次支援として一次とほぼ同額の医療機器類を寄贈しました。また寄贈した訪問診療車は病院に来るのが困難な高齢者や体の不自由な患者たちへ訪問医療が出来るようになり大変有効活用していると報告をいただきました。そして現在は、気仙沼医師会による最新のニーズ調査を基に第三次支援に着手しております。

医療機器の他にも、ドナー企業から寄贈のパソコン・プリンタ、衣類、医療用品(マスク、手袋、ガーゼ他)を気仙沼医師会を通して医療機関に寄贈し、また全日本サッカーチームのポスターやPHJカレンダーを気仙沼市の小・中学校や福祉施設等にも寄贈しました。

PHJは大震災発生から今日までの2年10ヶ月で20数回気

仙沼を訪問しました。こうした支援活動も医師会の協力がなければ出来なかったことで、改めて気仙沼市医師会の大会会長様並びに藤田事務長様のご尽力に感謝したいと思います。

被災地の完全復興はまだ先ですが、被災地への訪問を重ねるごとに病院の待合室は外来患者が増えており、看護師さん達が活発に動き回っている状況を見ると着実に病院の復興を感じると同時に支援の喜びを感じております。

東京事務所 横尾 勝



村岡先生の訪問診療



PHJ 訪問診療車でいざ出発!

会員のひろば

「PHJカンボジア・スタディツアーに参加して」 田野岡 理恵 (個人賛助会員)

私は現在、大学の看護学部に通う看護学生です。看護師の資格を得てから11年経ちます。看護専門学校を卒業後、病院の循環器科に勤務していました。病気で苦しむ患者様を見る度に、病気の予防の重要性に気づき、保健師を目指して大学に編入しました。大学の先生の紹介でPHJの活動を知り、2013年3月3日～9日カンボジアでの「農村で医療を学ぶ」というスタディツアーに参加しました。キリングフィールドやトゥールスレン虐殺博物館・アンコールワットの観光もあり、カンボジアの歴史的背景を肌で感じることができました。その中でもコンポントム州の母子保健活動に同行したことが、貴重な経験となり、卒業研究の題材を考えるヒントとなりました。

母子保健活動では、助産師や保健ボランティアによる村民への母子保健教育に参加し、妊産婦・助産師・伝統的産婆・伝統的医師の方にインタビューを行いました。以上の体験をプレゼンテーションして、ツアー参加者やPHJスタッフと学びを共有できました。

カンボジアでは、ポルポト政権によって医療が遅れて

おり、最近まで助産師の資格がない伝統的産婆による自宅出産が行われていました。お産の経過を気にすることがないため、新生児や妊婦が命を落とすことが少なくなかったとのことでした。そこで、PHJをはじめとしたNPOやボランティアが介入し、助産師による保健センターでの安全なお産が行われるようになりました。また、妊婦への妊娠・出産の教育を行ったり、妊婦健診で妊娠の経過を把握することで、死亡率が低下しました。PHJのようなNPO団体やボランティアの介入によりカンボジアの医療は大きく変わったと思います。私もその一員となれるように広い視野を持った医療関係者になりたいと思っています。このツアーに参加したことで、助産師の重要性ややりがいを感じ、助産師の資格を取りたいと思うようになりました。生涯にわたって女性の健康を守る仕事に携わりたいです。

PHJのスタッフの皆様、ありがとうございました。



家庭訪問をしたツアーメンバーとPHJスタッフ

・ イベント終了報告 ・

● グローバルフェスタ JAPAN2013

日時 2013年10月5日、6日 **場所** 東京日比谷公園

出展内容 「アジアのおはなしカレンダー2014」と応募作品の展示、母子保健改善活動の紙芝居、スタディツアー、HIV/AIDS 予防教育の紹介

ワークショップ スタディツアー



カンボジアスタディツアーの写真をみる学生達

● むさしの国際交流まつり 2013

日時 2013年11月17日 **場所** 東京武蔵境 シングビル

出展内容 「アジアのおはなしカレンダー2014」と応募作品の展示、PHJの活動の紹介

ワークショップ 武蔵野スカラレットと共同でカンボジアのお話の読み聞かせとお絵かき



カンボジアのお話の読み聞かせとお絵かき

フィリピン台風緊急支援募金を実施中

2013年11月8日にフィリピン中部を襲った台風「ハイヤン」により、レイテ島はじめ各地で甚大な被害が発生しました。PHJは現地で緊急支援活動を行っているシンガポールのNGO、Mercy Relief (マーシー・リリーフ) を支援するため、11月19日よりホームページ (<http://www.ph-japan.org>) で募金を開始しました。

Mercy Reliefは元PHJ職員の石関正浩さんが所属し、2003年にシンガポールで設立された災害緊急支援と社会開発事業を実施するNGOです。アジア23か国で災害緊急支援(2004年のスマトラ沖地震、2011年東日本大震災等)を実施し、6か国で社会開発事業(水と衛生、住宅、生計、避難施設、持続的な生活手段、健康、教育支援)を行っています。

11月の支援活動: 台風により深刻な被害を受けたレイテ島において、食糧・水や避難所の確保など、被災者の生存に直結する領域に焦点をおいた支援を行いました。レイテ島西部のオルモック、パロでは簡易水道器(電気を必要としない過装置)、タナウンで、避難所に暮らす2500の家庭に米や保存魚類、飲料水、衛生キットを提供しました。最新の活動についてはPHJのホームページにて紹介しています。



お知らせ

*ホームページニュースを郵送でなく、PDFでお受け取りになりたい方は info@ph-japan.org までお申し込みください。次号よりメールに添付してお送りいたします。

発行: ビープルズ・ホープ・ジャパン / 発行責任者: 木村 敏雄 / 編集人: 矢崎 祐子・南部 道子 / 発行日: 2014年1月6日
〒180-8750 東京都武蔵野市中町2-9-32 TEL: 0422-52-5507 FAX: 0422-52-7035 E-mail: info@ph-japan.org

ホームページ: <http://www.ph-japan.org>

本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。